

道 藝 媛

昭和十二年十一月十八日印刷
（第一日發行）
第百三十四輯
第十二卷

芝居の研究雑誌

第十二年
第百三十四輯



演劇報大國革新延長・晝夜二部

士月大歌舞伎

この機を逸して再び見れば
 寝れぬ力作の珍も夜も昼

破格の観劇料と常勝の凱歌は高し
 時間經濟の晝夜二部制に

連日晝夜満員御禮

暖房 装置 完備

歌歌舞舞伎座

(晝の二時開幕)		(夜の六時開幕)	
第一	木下蔭狭間合戦	第一	中山七里二幕
第二	後篇名和長年三幕	第二	戀飛脚大和往來
第三	安宅關	第三	涙の四少辻
第四	西五人女の樽屋おせん一幕	第四	上の巻道行浮
			下の巻三

一等席は五日即より・二等より櫻までは前日より發賣
 券は十五錢均
 毎開幕前に發賣
 専用電話(戎)二八二八
 一部觀劇料
 一等二円
 二等一円
 菊・五十五錢
 櫻・三十五錢

風味必ず御氣に召す

天ふら御料理

季節向御料理

佛蘭西御料理

芝居情緒と食道樂

喜久屋食堂

道頓堀戎橋北詰

御芝居の歸りには打ち揃ふて

お座席では是非御會食を!

支店

大阪支店

心齋橋筋八幡筋角
北新地裏町

京都支店

木屋町ドングリ橋





★道 頓 堀 第十二年 第百卅四輯 目次★

扉 カ ッ ト
 各座 グ ラ フ 十一月本誌特寫

「中山七里と」壽三郎 長谷川 伸 (三)

小太夫一座の創設案

戀飛脚に就て 高安吸 江 (四)

新口村事變 木谷蓬 吟 (六)

關西歌舞伎への期待 菱田正 男 (八)

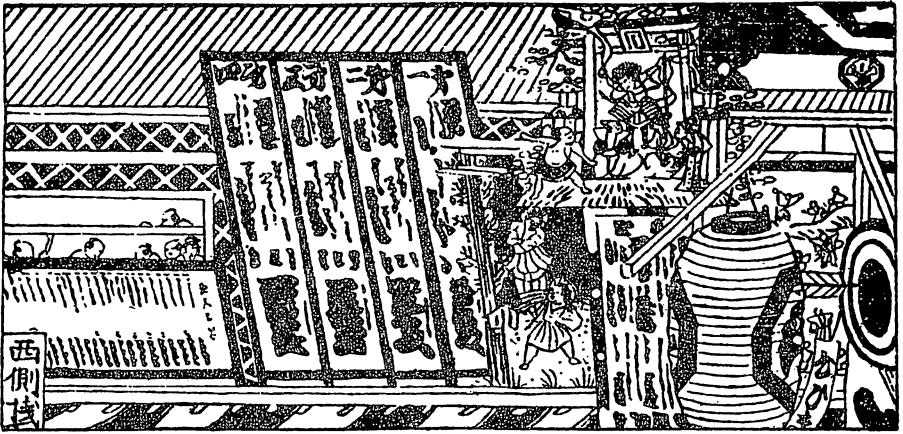
郷土藝術のために 高 谷 伸 (一〇)

關西歌舞伎の進むべき途 森 ほのほ (一一)

發展への過程 大橋孝一 郎 (一二)

關西歌舞伎の前途 川上利一 郎 (一四)

關 西 歌 舞 伎 論 劇 談 輯



家庭劇考

桂田曉香 (七)

家庭劇小論

谷健一 (一九)

十一月の狂言から

西尾福三郎 (三)

結成五周年

角座出演に際して

大江美智子 (四)

天網島と矢口渡

松本康子 (二六)

芝居見たま、

樽屋おせん

歌舞伎座 (三)

中山七里

歌舞伎座 (三)

映畫の頁

(二九)

道頓堀豆新聞

(二四)

編輯後記

村上勝 (四)

天下の銘酒

白雪

シラユキ

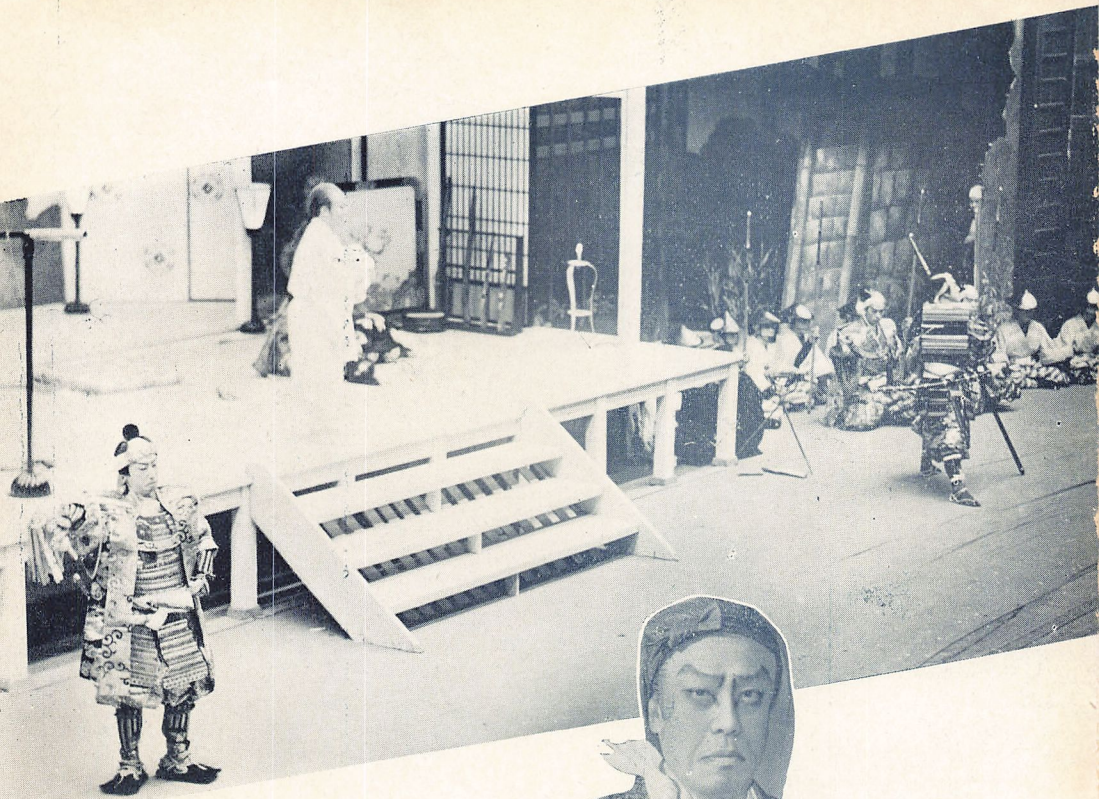


株式会社酒造西小 灘・丹伊津根



若 延 慶 辨 坊 藏 武 (關 宅 安)

行 興 月 一 十 伎 舞 歌 大 座 伎 舞 歌



【木下蔭狭間合戦】

竹中官兵衛重勝

延

若

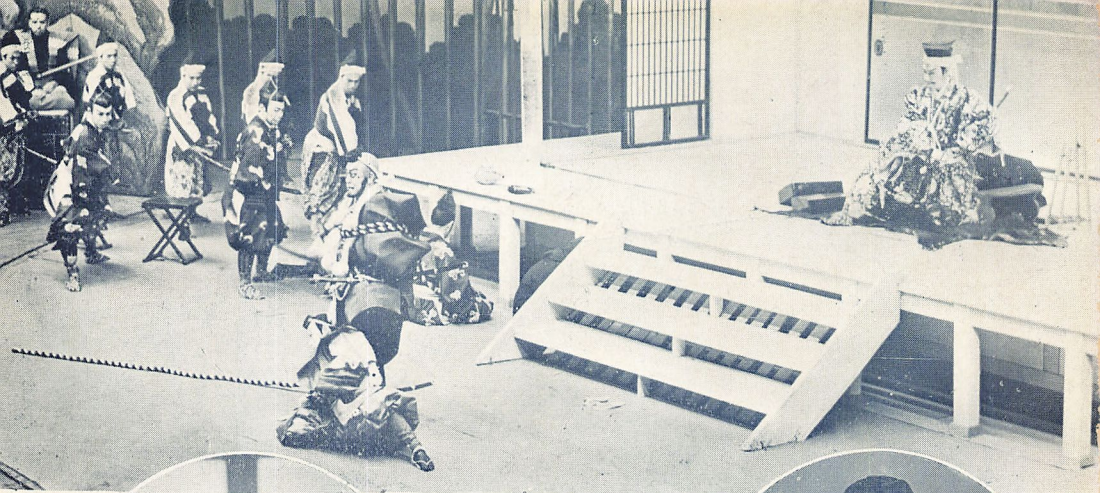
【上はその舞臺面】



【上はその舞臺面】

【名 和 長 年】

名和又太郎長年 壽 三 郎



富樫介宇直
梅玉



源判官義經
勘彌

【面 臺 舞 關 宅 安】 上

【面 臺 舞 ん せ お 屋 樽】 下



金鶏印罐詰 二大製品

- 1. 純良精選の牛肉
で御座います
- 1. 不意の御來客に
- 1. 御酒ビールの御友に
- 1. キャンピングに
- 1. ハイキングに
- 1. 各地百貨店
著名食料品店
に販賣致して居ります
- 1. キンケイ印を御指定下さ



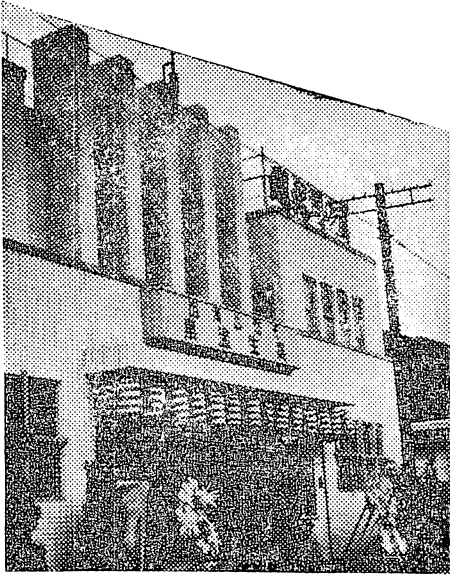
洋酒・食料品・罐詰問屋
 大阪市東區豊後町三番地
 株式会社 横山商店

團劇生長專屬

演 公 回 二 夜 晝

市內唯一の
天然湧出
長生温泉

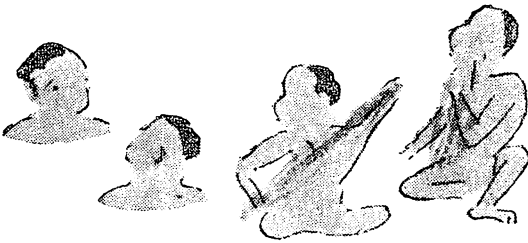
お家族連れにて一日中氣樂に遊べる



場内大設備

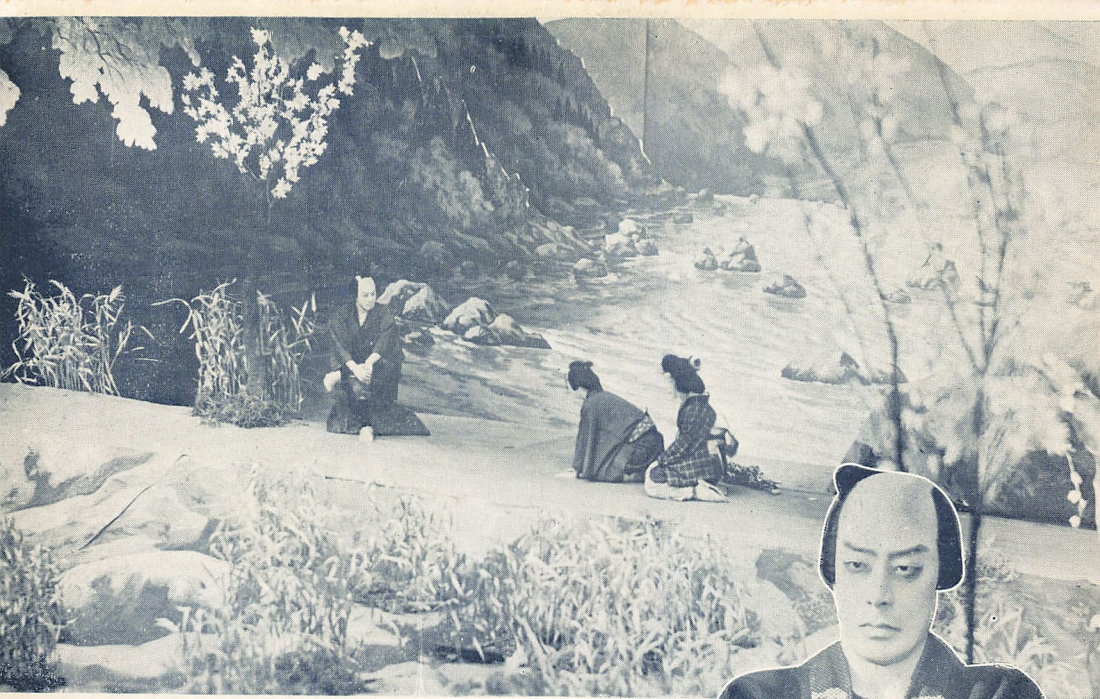
大餘興場 娛樂室 大食堂 喫茶室 宴會場 撞球場 屋上運動場 特別休憩室 賣店等アリ

感じのよい和室洋室があります
御宴會(和食洋食一品料理)團體の御申込みは
何時にても御相談に應じます。



此花區貫島嘉永七町

市電貫島大通三丁目下北へ入半丁
電話土佐㊦三二九番



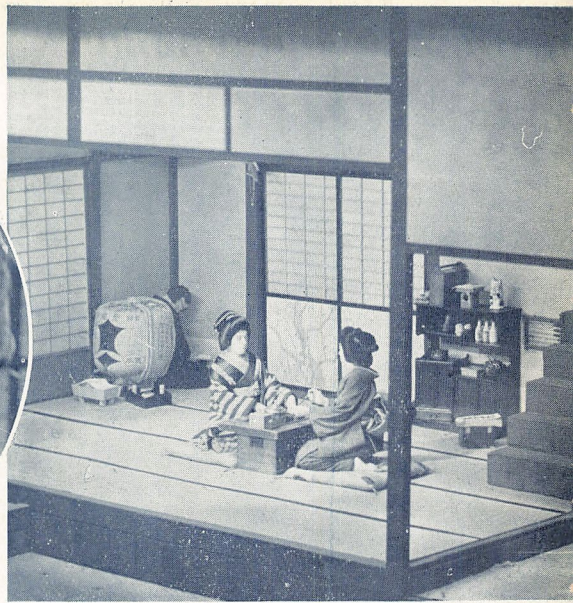
【里 七 山 中】

郎 三 壽 吉 政 の 並 川

面 臺 舞 の そ は 上

面 臺 舞 來 往 和 大 脚 飛 戀





「涙の四ツ辻」

娘 糸 お 染
 お た 之
 繁 次 つ 助
 芳 魁 梅 壽
 子 車 玉 郎



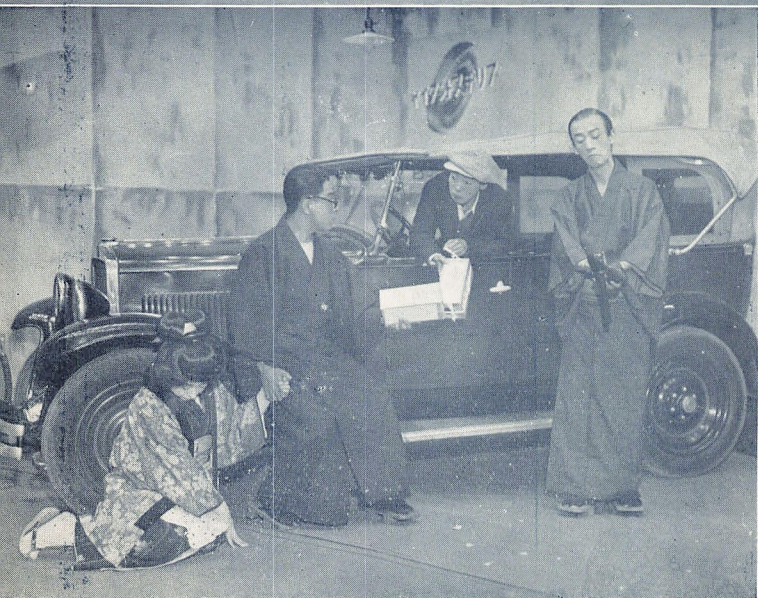
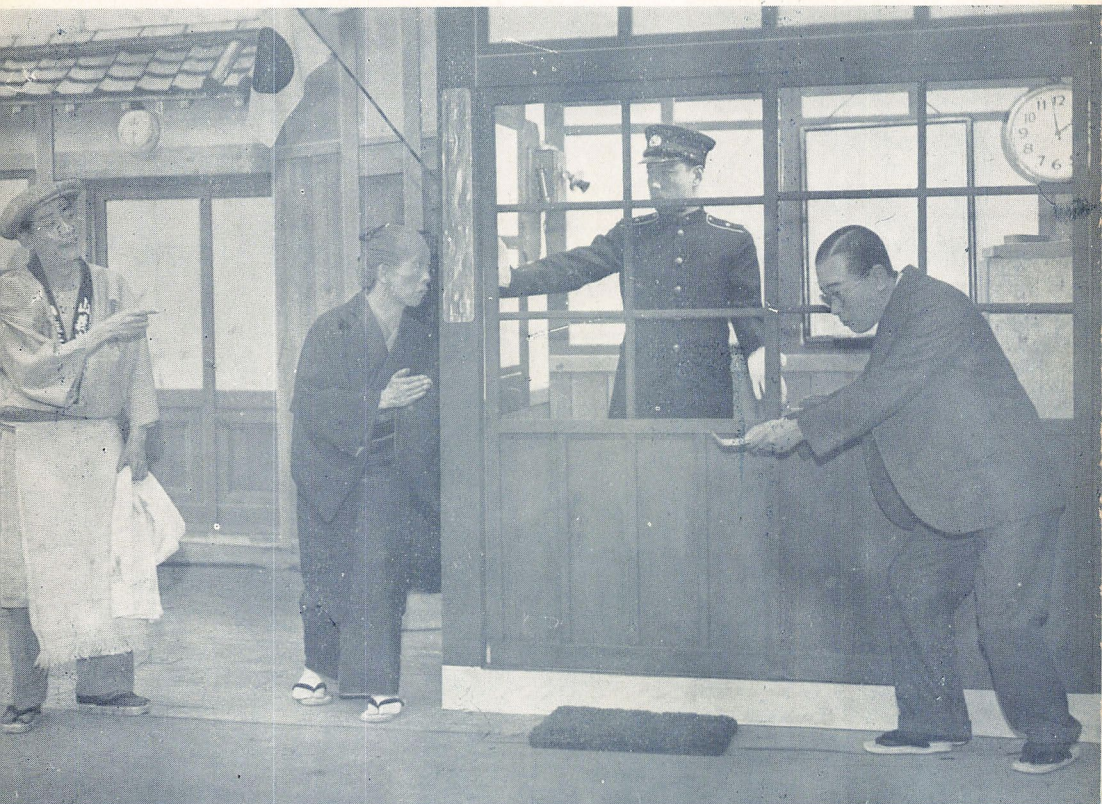
櫛屋伊助 魁車
 親孝右衛門 延若



〔三社祭〕
 舞臺面



〔道行浮岬鷗〕
 舞臺面



中座松竹家庭劇

米お巡 藥屋の主人
 倉 査 松
 屋 政 田

淡 十 天 小

海 吾 外 織



「花
柳
千
人
針」

お
よ
ね 葉

石 東

河



角
座

大江美智子一座

大江美智子と
「吼えろ軍犬」

舞臺面

十一月號

藝雜・演劇・刊
類編

第十二年

第百三十四輯

戀
飛
脚
大
和
往
來



梅

川
……
扇

雀

「中山七里」と壽三郎 小太夫一座の創設案

長 谷 川 伸

『中山七里』は私の初期の作で、昭和四年の八月に作ったものである。その年、私は飛驒に旅した。作家になつてからではあるが、その地位の如き、あるか無しの時であつたので、南飛驒から北飛驒へはいつて行く道々、一人の知遇さへなく、終日、口をきかずに旅する日さへあつた。その旅のうちで、心を惹かれた風土を、採りあげて舞臺面としたものが、『中山七里』である。

中山七里は上州にもあるが、今では中山七里の勝としいへば、南飛驒のものになり切つた観がある。私が旅したころは、中山七里とのみい

つたのでは、知つてゐるものがなかつた。その癖故人のこの名勝地を禮讚した詩文がすくなくない。

東京では尾上菊五郎君が『中山七里』を初演し、大阪では坂東壽三郎君が上演した。映畫では市川小太夫君の主演でトーキー劇のトツプを切り、坂東國太郎君の主演で並木鏡太郎君が監督した。それやこれやは中山七里の勝が、有名になるのに幾分か役に立つた、と、私は思つてゐる。その故であらうか、飛驒出身の牧野良三君が、私と友達との一群を高山に招いで遊ばせてくれたことがある。

葉言の著作

私はそれやこれやで、下呂温泉が好きで、一年に何回かは、必ず、下呂の湯の島館に泊りに行く、又近いうちに泊りに行かうと思つてゐる。「中山七里」を書く直接の感興は、前にいつたやうに、列車が焼石驛までしか、通じてゐなかつた頃の旅で起つたものだ。が、材料的にはその以前、女房に死別した後、旅してゐるうち出雲の境港で、呼んだ藝者が、顔も姿も一つとして亡き女房に似てゐないのに、起ちあがる時第一歩を踏み出すとき、亡妻が生きてゐる感じであつた。

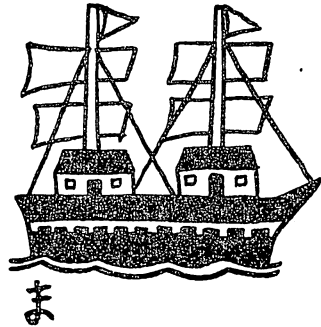
この時に起つた私の心理を、その儘「中山七里」の主人公に與へて、積極化させたものなのである。であるからあの劇は、女房を亡つた男だつたら、さうでない男よりもツとよく判る筈である。

劇中、飛驒高山の唄をつかつてゐるが、あの唄の方は飛驒人以外には出来ないものらしい。私の「一本刀土俵入」でつかつてゐる小原節と同じやうに、唄からくる哀情は今までの舞臺ではなかつた。今度はどうだらうかしら。

「中山七里」が菊五郎君で上演されるとき、私のモノが二ツ候補にのぼつてゐた。「街の入墨者」と「中山七里」である。「入墨者」は暗いといふので「中山七里」になつた。が、實はもう一ツ私のモノが候補にのぼつてゐた。それは「暎の母」であつた。無論、活字にならない原稿のまゝの時である。後で聞いてみると菊五郎君は、「暎の母」のことは全然知らなかつた中間で停頓してゐた事情もその後判明した。がそれにしても私は、「暎の母」がその當時、菊五郎君がみて上演欲を唆られたか、さうして上演されたらどんなであつたかと思ふ。

坂東壽三郎君は私のモノと因縁深く、「中山七里」も「街の入墨者」も演つてゐる。「暎の母」は演りさうでゐて演らすにゐる。

これは私の私案であるが、大阪にも、東京で左團次、猿之助一座があるやうに、壽三郎、小太夫一座をつくり、新作準新作を基調とした興行を、白井さん、多田さん、考へてみてはどうですか。



て就に脚飛戀

江吸高安

紙治が近松の、半二のが多く行はれてゐたやうに、梅忠は冥途飛脚でなく大和往來が普通でした。實の處、此戀飛脚大和往來といふ外題は芝居の方が先です。寶永七年の暮に忠兵衛が入牢し十日程で死んでから直其翌年の正月に京では芝居に仕組み三月には大阪で操にかけた。其竹本座のが云ふ迄もなく近松の冥途飛脚ですが、それから四十六年後の寶曆七年七月に道頓堀最後の芝居(今の浪花座)で始めて此大和往來が出ました。

此時の記録が無いので現在のものと何程異同があるか判然しないが、當時同座の作者に並木正三が居た筈ですから、恐らく彼の細工で原作を趣向本位に改悪したことゝ察せられます。

それから十六年後の安永二年十二月

に堀江で演じた義太夫、菅専助、若竹笛躬の兩人で書直したけいせい戀飛脚の丸本は今日もよく見受けれますが、現今行はれてゐる新口村は此戀飛脚の一段です。

専助等が寶曆に出来た大和往來の脚本を其儘義太夫化したか、或はそれと又別に直接近松の原作から取つたか、それ等に就てはまだ一切不明ですが、今日芝居でする新町の井筒屋と新口とは大體此丸本に據つたと見てよろしい。

それで此れと近松のとを比較すると原作では淡路町の飛脚屋、新町の楊屋越後、道行に續く新口村と上中下三段であるのに、改作では生玉に淡路町が上の巻、西横堀に井筒屋と新口が下になつてゐます。

人物では忠兵衛の養母妙閑の甥の利

平に八右衛門が安敵で恰度紙治の善六太兵衛に當ります。許嫁のお諏訪が紋切型の貞婦で、梅川の實兄梅川忠兵衛少々ヤ、コシイが親はもと堂上の侍であつたのが、零落して六條敷珠屋町に詫住ひ、其子の忠兵衛は大阪へ来て日傭取、それが妹の戀人忠兵衛を救はんが爲め侍姿で飛脚屋へ顔を出し「羽織大小上着を脱て、下はどてらの木綿縞 着物刀引くるめて今日一日が四百の損料」一寸天網嶋の孫右衛門といふ處です。お負けに新口の切では八右衛門に利平の兩人を散々にやツつける蛇足の場面などがありまして、どこまでも兎分として働かせてあります。此丸本が出てからは操の方が傾城戀飛脚、芝居の方は戀飛脚大和往來となつてをりましたが、やはり芝居の方に人氣が多かつた爲か、天保元年から義太夫の方も大和往來と云ふ名が使は

れ出し、殊に明治以降は殆んど全部大和往來と稱してをります。

面白いのは原作の道行相合かごの條が歌ひものとして江戸へ傳はり今日でも蘭八や一中に其名残をとどめてゐますのに、本家の上方ではいつも歪められた大和往來ばかりといふ奇妙な點です。しかしそれはそれとして、梅忠と云へば義太夫ではやはり新口がスグ頭に浮びます。故攝津大塚の越路時代にあの優雅な名調で「京の六條珠敷屋町」など、見臺へ手をかけのび上つた刹那は、唯わけもなくフラ〜と良い心地に酔はされました。

處がそうした場合でも見物の中で所謂お上り連らしい爺さん婆さんなどが思はず聲を立てゝ感に入るのは孫右衛門の言葉、例へば、

「盗みする子は憎ふなるて」
云々等大體原作の面影を傳へてゐる處

でしたので、私は流石に近松だと感心したことがあります。

實際新口の主役は孫右衛門であるべき筈ですが、其爲かいつやら、鷹治郎が忠兵衛と二役演つたことがあります。

此場の忠兵衛としては其以前優が魁車の梅川と花道で傘に隠れて互に抱き合ふたその艶麗無比な姿、例の「暖められて溜めつ」の處ですが、其時の美しさは今に忘れる事が出来ません。

孫右衛門はたしか初役らしかつたが、忌憚なく云へば未成品でした。鷹治郎といふ人は、幾度も〜繰返し〜して努力研鑽の後、始めて立派な寶石をつくり上げる風ですからせめてこうしたふけ役は猶二三回演らせた上でなければ眞價が決め難いと思ひます。それにしても切で『平沙の善知鳥』云々のあの美調を活用せず、經卷を振りまはし

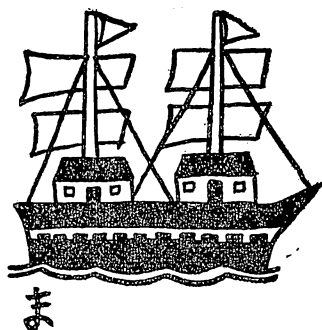
て愛兒の無事を祈る型は、熱演は熱演ながらまだ、研究の餘地が充分あつた筈です。

仁左衛門（先代）のは「繩かける人が恨めしい」で手首にかけた珠敷を繩にして見せたりする小細工は別として段切で床に充分語らせながらオロ／＼と落付かず、伸上り、足を爪立て見送る拍子に躡めいて膝つき、合掌する手順は、先づ無理のない行方と思ひました。

器用で腕の立つ、そして頭腦のよい我が河内家延若氏は、果して此兩役を何う演じこなすか、一寸興味の深い問題です。

變事「村口新」

吟蓬谷木



新口村も時代につれてだん／＼と變つて來てゐる。梅川忠兵衛の事件を始めて劇にしたのは、多分「けいせい九品浄土」らしいが、新口村の段は其筋骨から推して、出て居なかつたと思ふ

新口村の場が始めて描かれたのは、やはり近松の『冥途飛脚』からか、これが「けいせい戀飛脚」に改作され、歌舞伎の「戀飛脚大和往來」となつて、今日の舞臺に二百二三十年の命を續けてきてゐる。この新口村が近年になつて又甚だ珍な變りかたを見せてゐる、今度の歌舞伎座の所演も、そうしたことが云へるやうだ。

原作の『冥途飛脚』では、雨の新口村で雪ではない、雨の野道を道場参りがゾロ／＼行く、この方が情趣が深い又實地の新口村の風景も一望展開の平

野で、大和三山が配置よく美しい姿を
 観せてゐる、どうしても雨でないといふ繪
 にならない。後の作者が雪にしたのは
 唯舞臺面だけに囚はれたのか。今度の
 歌舞伎座も無論雪で、四方竹藪で圍ま
 れてゐる、これは實際の地理とは違ふ
 が、そんな事は問題でないとして、ひ
 どく陰鬱で、舞臺効果から云ふても、
 カラリとした大和平野でありたかつた
 忠三郎の家の構へも相當なもので、時
 代も江戸よりは明治あたりの感じだ、
 枕屏風があり納家まで付いてゐる、贅
 澤な小作人だ。

忠三郎の女房が、端役を超越した演
 技で喝采を狙ふてゐる、東京では清元
 入りで所作めかす演出もあるとか、紙
 治の河庄の門口での丁稚三五郎など
 同様近年こうした必要以上に端役活躍
 の傾向が頻りに復活される。竹中碧の
 三人注進の演出にも此臭味がある、役

柄の本分と云ふことの判らぬ役者が殖
 えたと思へる。

忠兵衛と孫右衛門早替りといふ風の
 末期病が、これも近頃の流行らしいが
 その爲めに新口村の一番情趣の盛り上
 がつてくる、例の竹連子の反古障子か
 ら梅川と忠兵衛が、道場参りの人たち
 から孫右衛門の姿を見付けるあたりの
 情景が全然削られてしまひ、その代り
 に萬歳が飛び込んだり、鍼立ての道庵
 が方角を違へたり、道場参りの人数が
 節約されたりして、事變らしい空氣が
 漂ふ。

藝評には一切觸れないが、たゞ扇雀
 の梅川は作意を解し役柄をよく心得た
 演技だつたと云へやう。

これも藝評とは別だが、忠兵衛の詞
 に『御所街道』を、ごしよ街道と云ふ
 てゐた、御所と書いてごせと讀ませる
 こと、河うち屋と書いて河ち屋と云ふ
 が如し。(初日見物)

シリウタオネリに 核結

… 科病柳花 …

院医原藤

★ 番 六六 三六 二六 戎話電 ★ 入西側ノ溝筋橋戎 ★

シリウタオネリに 核結

西 關



關西歌舞伎

への期待

菱田正男

重大時局に完全にKO喰らつたのは芝居で、殊に歌舞伎はひどかつた。東京、大阪とも大頭株はズラリと顔を並べて休演するし、大劇場で映畫館に早替りしたのも尠くなかつた。

だが十一月の聲を聞くと同時に歌舞伎は東西ともに驟然起つた。所謂顔見世月を迎へて東都劇場はハリ切つた。

關西も亦劣らず、十月にひきつゞいて大阪歌舞伎座に關西大歌舞伎の延長興行を開演した。正に好劇家待望の秋といふべきである。

十月の大阪歌舞伎座に於ける關西歌舞伎はわれ／＼が大いに期待したものと

だつた。自分はつねにオール關西歌舞伎が年に一回か二回京、阪いづれかで開演されることを主張して來ただけにこれは非常に愉快だつた。いろ／＼傳へられる幕内の事情はさておいて、延若、梅玉、魁車、壽三郎、市藏、小太夫、扇雀、成太郎らがハリ切つた舞臺を見せてくれたことは嬉しかつた。是非ともこの興行が繰り返されることを期待したい。十一月もひきつゞいて開演とあり、東京から勘彌、鶴之助の加入があるが、これは顔ぶれを新らしくするため氣分轉換的な興行政策だつたらうが、これはむしろ加入のなかつた方がいゝと思ふ。同時に本當のオール關西歌舞伎でもう一ヶ月延長させたかつた——これは素人の無理な願ひかも知れないが、つねに『東西合同大歌舞伎』の看板をかけたがるやうにも思へるのでこの機會に關西歌舞伎尊重の意

歌 舞 伎 論

味で將來へも希望しておく。

十月の歌舞伎座で、鴈治郎歿後はじめて大阪で延若が紙治々をやつた。

いろんな意味で興味があつた。しかし鴈治郎のよく演つた近松半二の紙治でなく、近松門左衛門の紙治だつた。脚本の違ひこそあれ、延若の紙治はたしかにいゝ味がある。鴈治郎のそれとは全然違つたよさを見た。おさんは當代一の梅玉とて、この名コンビはたしかに今後の關西劇壇の世話狂言を復活させてくれるに違ひない。それに『藍染川』もまた捨て難いものがあつたやうだ。

こんどは「梅忠の新口村」が出てゐる。鴈治郎によつて好劇家に印象づけられた名狂言が、更に延若によつて磨きをかけられるのも好ましいことだ。

「櫓屋おせん」や「涙の四ツ橋」などの梅玉、魁車、壽三郎のクかなへ會々

得意の軟かい作が幾度も上演されるのはいゝ。

だが、「母の手紙」などはなるべく避けた方が得策だ。關西歌舞伎の演しものではない。やはり専門家に任すべくして新派人の如だ。それに魁車が依然ク何でも御座れ々の器用なところを盛んに發揮してゐる。

梅玉の品のよき、壽三郎の豪放さと相俟つて、このクかなへ會々の健在をこの上ともに祈りたい。

中堅の扇雀、成太郎、小太夫らの健闘も大いに見るべきものがあり、關西歌舞伎萬歳だ。

この機会にしつかり手を組んで事變下にク演劇報國の實をあげるのは關西歌舞伎に課せられた重大使命ではあるまいか。

(十二、十一、一)

郷土藝術の

ために

高谷伸

關西歌舞伎は今、關北のポケット地帯に籠つてゐる。といつては甚だ禮を欠くが愛すればこそその苦言だ。まあ聞いて下さい。

三百年の傳統を保つ關西歌舞伎が金城湯池であつた鴈治郎を喪つて以來、だんだん戦線を壓迫されてこゝに至つた感じをいふのである。この上舊英租界へ遁入したら武装解除の外はない。その生きるべき道は英米依存の排撃と容共聯蘇の絶滅にある。

つまり關西歌舞伎の事こゝに至つたのは遠交近攻政策の福だといひたい

のである。

今や國民精神總動員の秋にあつて地方色を説くは甚だ時勢逆行のやうではあるが、藝術といふものは微妙なものではつきりとこれが重要な要素となつてゐるのである。日本の歌舞伎には二つの潮流がある。これが容易に混和しない一例として次の話を擧げる。

何かの狂言で延若が菊五郎と一座した時、延若の江戸辯が如何しても六代目を満足さすまで言へなかつたのだからである。その代り堀川の興次郎で菊五郎の持つ詭りが如何しても延若を満足させなかつたといふのである。

延若、菊五郎の如き第一人者でも、或は第一人者が聞くが故にかも知れないが、お互ひに言葉の上に溝をもつてゐるのである。

所詮、東は東、西は西といふ言葉が狭い日本の中でも言へるのである。

かう言へば關西歌舞伎の道は説かずして明らかである。

筆者も既に中央演劇（一ノ二）P.C（三十五號）等に數次これに就て述べたものである。

具體的に言へば先月の『藍染川』の如き魁車、壽三郎、梅玉諸丈の努力と器用で或程度まで見せてゐても何となく水の違ふ感があり、『涙の四ツ辻』の再演を見るのはやはりその脚本が關西化されてゐる餘得である。藍染川と横堀川とでは水が違ふのである。従つて觀劇心理も等しくはないのである。由來、關西歌舞伎には操りの歴史的緣故もあり時代劇の演出に特長があり近松以來世話物の妙味もあつた。敢て江戸系の歌舞伎に阿る必要はない。

新時代にしても新時代の近松出でよ、新時代の雲出でよの意氣で上方人のための上方劇を、われら郷土の作家と

郷土の俳優と、そして郷土の演出家によつて生み出すべきである。

そして、余力あれば東京劇壇に進出するだけの覇氣を養ふべきである。

三世中村歌右衛門も並木五瓶も上方から出て江戸を席捲した名手なのである。

それに徒らに時代の潮流に押され東京劇壇の後塵を拜し郷土藝術の再生を計らぬことは遠交近攻政策と何等選ぶところが無いといふのである。

舞臺に立つものは舞臺で筆を執るものは筆で、郷土藝術のために、進んでは國民藝術のために奮起すること、國民精神總動員の趣旨にも合致することだと思ふ。

X X X X

關西歌舞伎の

進むべき途

森 ぼの ぼ

關西歌舞伎の將來性とか、待望とかに就いては、これまで度々論じられてゐるので、事新しく述べる程のことも持ち合はせませんが、折角、編輯部からの課題でもあり、『歌舞伎』なるものが不信用になつてゐる折からでもあり、兎も角も簡單ながらお答へすることにします。近頃ヂヤアナリズムに動かされてか、『歌舞伎』が輕視され勝ちなのですが、能が亡びてはならぬやうに、『歌舞伎』も亦決して亡びてはならぬのであります。

徳川三百年の太平は、細い釣竿一本

にも並々ならぬ工夫、研究が施されてゐるので、平ツたい言葉で云へば、總べての娯樂に興味にめいめいが、長い間いろいろの骨を折つてゐたのです。そして『歌舞伎』も亦その娯樂、その趣味の一つでした。

徳川期にあつては、吉原その他の遊里が各階級の社交場であつたやうに、芝居も大衆慰安の目的に添ふものでした。さういふ意味の下に歌舞伎の芝居は作られ、演ぜられたわけです。ですから、芝居は作者の思想や意圖を主張するといふやうなものではなく、よし作者に理窟や議論があるにしても、それを裡に隠して、作劇上の技巧の कोरोモを掛けて、表向きは感覺にのみ懇へて、甘じて大衆の娯樂となり、慰安となつたのでした。

併し、歌舞伎の経路、閱歴が示すやうに、能などの一定不變（といつても

極めて正確にはありませんが)のとは違つて、これは流動性を持つものです。五代目菊五郎の歌舞伎と、六代目菊五郎の歌舞伎とは大層な相違です。江戸歌舞伎と上方歌舞伎の差異も亦歌舞伎の融通性を語るものです。

かういふ次第故、京阪に於ける今後の歌舞伎も、遠くは宗十郎、近くは鴈治郎の歌舞伎とは當然違つたものである筈です。それならばどういふ歌舞伎が今後脚光を浴びるのかの問が起つて来ますが、それは最早、感覺に憑へるのみのものではなく、劇中人物の性格或はその性格や境遇から起る心理的變化、さもなくば、作者の思想や意見を中心としたものでありませう。

今度の歌舞伎座に『竹中官兵衛の若』が上演されて非常に好評ですが、それもこの作が、單に見懸げばかりの事件を主としたものでなく、軍略家官兵衛

の古武士的な節義と、人間的な恩愛との交錯する處に興味が持たれるからでありませう。さう

いふ意味で『太平記身替音頭』の齋藤太郎在衛門の苦節なども大いに迎へられ

るものでありませう。で、今後の歌舞伎は、在來の歌舞伎劇―所謂上方歌舞伎をも含めて―の保存と同時に、現代の人々にも共鳴を持ち得る歌舞伎が、或は脚色され、整理され、或は新作

されるべきでありませう。

幸ひにして關西には梅玉、延若、魁車等の元老役者が尠くありません。歌舞伎の保存や歌舞伎の定本の作成は、

繁華街に近く、交通至便
閑雅な和洋室！
◇モタン階上浴室新設◇

南地ホニテ

一 宿 一 三圓
一 二圓
一 半 圓
魁半額

南地戎橋電停前
電話南四一四・四四一

今が正しくその時機でありませう。

新しい歌舞伎の創造を壽三郎や、扇雀達に希望すると同時に、古い歌舞伎の保存も今にして考究されねばなりません。

何故、歌舞伎を保存すべきかの問題はまた別ですから、それには只今は、わざと言ひ及ばぬことにしました。

發展への 過程

大橋孝一郎

北支事變の勃發は私達の日常生活を亢奮と、感激の坩堝へと巻込んで終つた。日清は勿論、日露戦争ですら知らない私には、全く生れて始めて知つた感興であつた。そして命を賭しての戦ひの前には、如何に私達の生活が貧弱な繰返へしであるかを痛感せずには居れなかつたのである。

そして、も一つ私を感激させた事は學國一致の成果であつた。ピツタリと一致した團結の力は、神々しい程尊い心の象徴である。如何なるものも、これに及びかふことは不可能であらう。かうした二つの経験は、今回の事變

で誰しも心を打たれた感情と思ふが、私達は此の際此の尊い感情を押廣げて自分自身の生活を反省して見る必要がありはしないか。

勿論この反省は、發展過程を前提としてのものでなければ意義をなさない事は云ふ迄もない。即ちあらゆる文化水準の高揚を意味するのである。大きく見て國家社會の文化、小さくて各個人の立場と部門から、此の用意がなされねばならないであらう。戦争の成果は此處に始めて開花結實するのである處で、そうした論理から推し進めて私達は演劇文化の發展をも大いに刮目してよいと思ふのである。

現在の情勢下では、あらゆる文化的な仕事は一時おあすけの形にある。演劇界に於ても、昨年あたりより顯著となつた既成營利劇團が新しい脚本に對する意欲とこれが上演の良心的傾向は

一時頓挫の状態にある。が、然し現在幸ひにして若しも心ある演劇人が、將來ある發展過程を基礎とした反省と心構えを用意しつゝあるなれば、必ずや近き將來に於て、一段の飛躍をもつて私達の眼前に相まみゆるに相違あるまいと確信してゐる。

例へば、そのあらはれとして、十月角座で試みた、前進座の短時間三回興行、又は東京國際劇場で、低廉一圓五十錢で開場した左團次の機敏な英斷等其處には將來の演劇を示唆する何か新しい意味深いものが介在してゐるやうに思はれるのである。そして私はかうした試みが將來立派な捨石としての役目を果さんことを念じて止まないところである。

歌舞伎の人々も何時までも時代を忘却した城廓の中に閉籠つてゐるやうな安閑とした生活が許されなくなるであ

らう。向上過程にある大衆性を確實に把握した大衆演劇の中に身を持つて飛び込んで行くだけの覇氣と決心とがなされなければなるまい。戦争の亢奮は其處まで歌舞伎の諸君に要求してゐると考へていゝと思ふ。

關西歌舞伎が、幸ひにも十月から二部興行と観覧料の低下をモットーとして、今日の非常時局を乗切らうとしてゐることも眞に結構な方針である。

私は希くはかうした試練の中から、次の時代への効果的な制度なり、飛躍的な方針が誕生するなれば、ともすれば陳腐を傳へらるゝ關西歌舞伎のために、これに越したる喜びはないのである。

此の革新興行も此處に至つて始めて本眞の意味での革新興行の面目を發揮すると云つてよからう。私達はその點に大きな期待と信頼とをかけて望んで

る譯である。

私達は今日の戦争に遭遇して、如何に私達の日常生活なり、氣持なりが貧弱なものであつたか暴露された。私達はかうした機會に、大いに大乘的でも達觀的な氣持、即ち取るにも足らぬ末梢的な些細事に拘泥しない氣持を養成したいと思ふ。

そして次の時代のあらゆる文化的な建設も、此處を基點として出發したいと考へる。勿論、演劇に於ても然りである。

されば關西歌舞伎の各優達も、かうした遠大な理想の下に結束團結を固めてほしい。

そして新しい關西歌舞伎の進路を樹立して頂きたいのである。

それが戦果に報ゆる各優達の抱負であり仁義であるべき筈である。

(十月三十日稿)

關西歌舞伎の前途

川上利一郎

『東京歌舞伎が東西合同でなければ』等と屢々好劇家の口の端に上り、其の不振を嘆かはれてゐた鷹遊きあとの關西歌舞伎が、事變渦中の大殿堂で、堂々二月に亘る居据り興行は、未だ其の命脈の衰へ切らない現象として大いに意を強くせしめるに足るものがあります。

私は此の興行が巷間に傳へられる様な、一部俳優に對する生活の救済の意味が含まれてゐる等とは考へたくもありませんし、信じてないので、現状に懐かぬものを感じる一人です。

關西歌舞伎は何處へ行く——幾度か

先輩諸氏に依つて論議せられ、其の更生の策が建言せられて居り乍ら、未だ活氣ある新生面に接し得られず、鴈後三年、沈滞の内に其の日暮しを續けてゐるのはどうした事とせう。久しい間、鴈治郎におさへられ鬱積されてゐた力が、同僚の死に依つて表面へ踊り出て沸騰し、却つて生氣ある活躍に接し得られるのではなからうかとの私かな期待も水泡に歸して終つたのが今日です。今にして鴈治郎の餘りにも大きな存在であつた事が沁々と想はれます。

だが關西歌舞伎か此の儘枯死してしまふと云ふ悲觀説には賛意を表し兼ねます。尤も東西には藝風の相違があり、關西には上方風の味があるのですが、今後は、頻繁なる東西劇風の交流に依つて自然に藝風の特徴が漸次稀薄になつて行く事は否めないでせう。敢てこれに拘泥する事なしに關西歌舞伎

なる區分的な存在は許されるでせうし現在の頹勢を挽回する時節が必ず到来するであらう事を信じて疑ひません。現在の關西歌舞伎の諸優—延若、梅玉、魁車、壽三郎始め他の人々の實力に於て、東都の諸優に決して劣る

御觀劇には特に



新發賣 鶉せんべい
御推奨申します

歌の亭 食品

〇二・一 共料送 入罐美優

ものではないと思ひます。唯此際私の痛切に感ずる事は、此等の諸優が單なる俳優の立場に満足せず、もつと各自の重大なる責任を自覺する事にあります。而してお互が明敏に時代民衆

の要望してゐる心を把握する事に努め萬難を排して其の實行に邁進する氣魄が望ましいと思ひます。配役上の不平等の紛糾は最も嫌悪すべきものですが民衆の心をつかんだ演劇を實現するため、妥協を排した、ひたむきな熱意ある各俳優の主張に依つて摩擦の生ずるのは生氣があり、寧ろ好ましい事だと思ふのです。

此の意味に於て、これらの諸優が二派乃至三派に分立し、お互が最もよいと信じた目標に向つて邁進し、藝術上の競争意識に燃えて互に鎗を削る程の氣骨があつて欲しいものです。斯くする事に依つて年に一度か二度の大合同も東西合同と共に又大いに意義のある存在となり、斯かる刺激に依つて必ず民衆をして看過さず事が出来なだけ其の吸引力をいつの興行にも持つ事が出来るでせう。かねて噂のあつた壽三



田丸 大蔵規那補血葡萄酒
滋養補血

創業明治五年

株式
會社

横山商店

大阪市東區豊後町三番地

電話東94代表三八六五番
振替口座大阪二八四七番

洋酒・食料品・罐詰屋

郎の第一劇場再興の事實となつて現れる日はないのでせうか。これも出来得れば實現させたいもの、一つです。忌憚なく言ふ事が許されるなら惰眠を食つて居られるだけ、現在の關西歌舞伎は未だ最後の關頭に立ち至つてゐないのかも知れませんが、若しも此の發奮して貰ひたいのです。若しも此の望が實現されなかつたとしても決して私は望をまだ捨てません。現在の儘を

以てしては早晩瀕死の状態が訪れる事は燎原の火を見るより明らかです。其の時こそ、乗るか否か、乾坤一擲の奮起を除儀なくされ、其れに依つて徐々に黎明が訪れるのではないのでせうか。最悪の場合でも氣永く待てば、昔日の隆んなる佛を偲ぶ日がないとも思はれません。

所もあると共に長所も決して尠くないのです。此の長所を活かし、新しい形式を遠慮なくドシ／＼加味して行くところ、國劇として決して衰微するものではないと信じます。たゞ徒らに追隨を事とし退嬰的なものであつてはならないのです。關西俳優諸氏の頭張りを切望しまして私の無遠慮な稿を了ります。(二二、一一、三)



家庭劇考

桂田 曉香

關西で、十年以上も生命のある劇團と云ふのは珍しい。新派など、何度結成され、何度解散されたか知れないところが、家庭劇だけは、不思議に十年以上続いた。其続いた原因は一體何處にあるのかと考へて見た。

それはいろとくある。先づ第一にあげてよいのは、時代相と云ふものを常に捉へて居るのである。

第二には脚本に不足を來さないと云ふ事。

第三には座員の融和が圖られてゐる事、常に大衆を目安に置いて番組が建てられてゐる事等いろとある。

そして之等の何れが欠けて居ても劇團生長には支障を來すのである。

脚本難に陥入つたり、座員のにらみ合ひが出来たり、あまりに高踏的であつたり。

△ ▽
ところが家庭劇は、苦勞をしつくりて來た人達ばかりの集りだけに、己れ

と云ふものをよく知り、綜合藝術としての演劇をわきまへ、小我を捨て劇團生長のため邁進する——と云ふモットーで進みつゝあるところに家庭劇の生命がある。

老若男女に迎合する演劇など、なか／＼云ふ可くして實行に移し植ゑられるものではない。

老人に受ければ、若い者には受けない、ところが家庭劇はこの誰にも共鳴出来る演劇を提供して居る。

それは勿論各優の演技にもある事乍ら、脚本のよさである。

十吾君の如き芝居をよく心得た人が観客の心理をよく掴んだ上に筆を執るんだから、ソツが無くムラが無い。

それに福徳圓満居士の山上貞一氏が監督者として、よき作品の提供を受けて居る。

△
▽

十吾君は、どんな役をやらしても、よく活かす人である。
然し老婆だけは何と云つても天下第一品、それも比較的ジジムサイ役が成功

本誌の月極め

御講讀を！

一ケ年

三圓三十銭

してゐる。

淡海君は淡海君で、一座を率いてゐた人だけに、いゝところのものを多分

に持つてゐる。強い立役など、實に味の出す。

君が、十吾君と手を組んで、最初に舞臺に現れた時、涙ぐましい位、ほゝ笑ましいものを感じさせられた。

よく自分を知り、家庭劇のカラーをよく呑み込み、一座の融和點を見出してゐる。

天外君も家庭劇には重要な役割を持つてゐる。

芝居もうまいし、人間もなか／＼出て來てゐる。

△
▽

女優陣には、石河薫、東愛子、浪花千枝子、小松孝子等、何處へ出しても恥かしくない人ばかりで、此座にはパイプリーヤーが揃つて居る。

天照君など、家庭劇として、無くてはならぬ存在である。

家庭劇小論

谷 健 一

世の中が尖鋭化するにつれて笑と云ふものがどうも忘れられ勝になる。笑なき社會、想像するだに陰鬱であり、寂寥たるものである。

一日の勞苦を忘れさせて呉れるのも笑ひであり、又明日への活動力を與へて呉れるのも笑ひである。

其の意味に於て今尙關西唯一の喜劇團として變らざる人氣を持續して居る我家庭劇は現在に於て笑ひの要素であり、無くてはならぬ娛樂機關である。

近頃やゝもすれば輕重浮薄、荒唐無稽的な喜劇が要望されるがこの非常時しかも戰時體制下にある現代に於てやはり喜劇としても日本精神をキヤツチした眞の意味の喜劇でなければやがては泡沫の如く消えて了ふであらう。

誰が見ても面白いと云ふ事を標榜して居る家庭劇は其點十吾を頂いて居る丈に力強い。この才人益々其の才能を發揮して今では十吾あつての家庭劇であり、我國喜劇俳優として一異彩を放

つて居る。家庭劇を今日の隆昌に導いたも十吾、又現在の人氣を博しつゝあるのも十吾、この人の編み出される脚本にしても一つ一つこの人の勞苦を思ひ出される。脚本に、演出に彼は今後共に働き続けなければならない。近頃での印象はク一本杉々の瓢々とした裡にベーツツツクな彼の演技益々老巧と云ふには餘りにも若いが圓熟された芝居を見せて呉れた。それはこの人としてたくまざらんとして巧まれた藝風から醸し出されたものであらう。

十吾との名パツテリーに天外が存して居る。一雄時代、淡海劇でよくこの人のコマシヤクれた演技に思はず笑ひを誘はれたものだ。あの調子外れの臺白が今だに耳朶の片隅に残つて居る。十吾と組んでからの天外、昇龍の如き勢で人氣が出た。十吾の舞臺に天外がなければ何となく淋しい。十吾の細

い線に對して天外の太い線のコンビは離れられざるものとなつて了つた。少年時代を知つて居る丈に一本杉々の彼を見て思はずホロリとさせられた。受嬢のある人でこの人が舞臺に出れば何となく賑やか、喜劇を見に来たと云ふ氣持を第一抱かせられる。得な人だ。

併し世人は知らず、天外のドタバタ喜劇、僕は餘り好まない。

ドタバタするとこの人の嫌な癖が目につく所謂似輪加風とでも云はうか、家庭劇より一步踏み外れたものを見せつけられる様に思ふ。

併し天外の研究心の強いには感心させられる。

十吾に私淑して居ると聞くが、折角その精神を忘れず家庭劇の爲奮闘して欲しい。

それがどれ丈この人の將來に役立つ

か、天外を知る誰もが思ひ當る事であらう。

折角慢心せず精進努力されん事を望む。將來ある丈に……。

天外の一雄時代で思ひ出されたが或る意味に於て、天外とは切つても切れぬ關係がつくられて居る人に淡海がある。あの餘りにも有名だつた淡海節の昔が懐かしい。

特に京都に地盤を多く持つて居つたこの人には云ふに云はれぬ親しみく近所のオツサン々とでも云ふべき親しさがある。

十吾とは又變つた面白さと云ふより味を持つて居る。

かつての一座の座頭としての風格を持つて居る丈に、舞臺へ出ても何處となく、観客をアツピールするものがある。

再びク一本杉々だがあの百姓に扮し

ての一カツトほんの一カツトなんだが巧い。

やゝもすれば主役を喰はんとする傾向それ丈は慎んでほしい。

郷に入れば其の郷に從への諺もある如く、生れ變つた淡海としての更生をお願ひしたい。

久し振りに懐かしの淡海に接して老いたりとは云へ筋金の通つた彼の演技を見て嬉しかつた丈に、其感を深くした。

最後に一言、十吾の胸底深く秘められた明日への家庭劇の壯途を期待してペンを擱く。

× × ×

× × ×

★ 一十月の狂言か ★

西尾福三郎

十一月の霜月芝居は東京では顔見世興行に當る所から、自然大掛りな座組みとなり、それに呼應する意味で大阪に於ても以前は霜月芝居と云へば年中を通じて書入れの豪華な芝居を打つ例になつてゐたものである所が時將に非常時とあつて大改革を標榜して開演した十月興行が相當な成績であつた所から、引續いて超越しの一座へ東京から新顔を加へて新舊とどりの種目をズラリと並べた中から撰り取り見どりで眺めてみよう。晝は時代物、夜は世話物と云つた建て方が先づ目

につくが、中でも大時代なのは
木下蔭狭間合戦
先年成年に因んで文樂の津太夫が語つた事があるがこの作はつゞら抜けの石川五右衛門劇の母胎であり、あの場面に到る前半が今度の芝居に當る譯である。何うした拍子の瓢箪からこんな珍らしいものが歌舞伎座の舞臺へ飛出したのか知らないが、何にしても興味が深い。一番目向きの陣屋物として人物が多くて賑やかな點もあり、鎧武者が装に包んだ赤子をその背に負つて、敵方になつてゐるその

子の祖父に對面させると云ふ趣向も頗る大時代で面白く、末段いんのこの唄で三味線の調子が快い救ひになつてゐる事も特記しておいていゝだらう。續く大物は、
安宅關
で、これは故人中車の當り藝であつたが、今日では延若が度々手にかけて河内家の賣り物の一つになつてゐる。勸進帳のやうに派手な問答がないのでバツとした所がない代り、辨慶が後ろ手に縛られたまゝ顔一つで總ての芝居をやつて行くと云ふ所に見巧者の好む

皮肉な味があり、全體にくすんだ渋い味のある所がこの芝居の特色であると云へやう。

梅屋おせん

は云ふ迄もない西鶴物に據つた故郷雪氏の代表的な脚色物であり、梅玉の當り藝の中でも屈指の自信あるものと稱して敢て憚らないであらう。こゝに描かれたおせんの微妙な心の動き方は單なる古典の世界の物語りではなくて、今日洋服を着せた芝居に書直しても立派に通用する人間心理の動き方を捕へたものだと思ふ。

中山七里

は第一劇場華やかなりし頃、壽三郎と石河薫のコンビによつて上演されて以來のもので、長谷川伸氏のこの作によつて飛驒の中山七里が紅葉の名所として廣く天下に喧傳され出したと云はれてゐる。壽三郎の政吉は固よりとして、目明し文太郎の性格の厭な一面が鮮明に出てゐた點で妙に私の印象に残つてゐる芝居である。

新・口・村

歌舞伎座のこけら落しの時に大掛りな装置で見せてアツと云はせて以來のもの

◇テシト「一トツモ」ヲ價安實確速迅◇

劇場
演舞場
裝飾

營業品目

店頭裝飾	微章
室内裝飾	造花
町内飾付	久壽玉
催物裝飾	花環
	花簪

TRADE MARK



上 村 商 店

大坂市東區南久寶寺町三丁目

電話場(83)一七〇番・替座口内阪二七〇番

各意匠、裝飾、考案調製致シマス
船場一〇七〇番へゼヒ御電話ヲ...

で餘りにも有名な梅川忠兵衛道行きの段である。

あの時の鴈治郎の忠兵衛は今から考へて一世一代のものであつたが、可なり意外なやり方もあつたやうに覺えてゐる。

今度も恐らく忠兵衛と孫右衛門とを延若が早變りで見せるのであらうが、元來この場面は淨りりとしては聴かせ物であるが、芝居としては左程大した演所のあるものではない。たゞ子を思ふ親の情愛にホロリとさせる所が山であつて、淨りの文句にある平沙の善知鳥のあたりが見所きゝ所であ

ると云へば足りやう。

涙の四つ辻

は川村氏の現代物を指物に更へて、魁車を中心に壽三郎、我童で演り、又壽三郎、梅玉で演り、今度は確か三度目の見參で、かつては好評の極續編まで書卸されること云つた當り芝居で、もとより卒のない手だれの舞臺を見せる事であらうと思ふ。

× × ×

× × ×

スセロプ
作製板看術美

るゆらあ
廣告傳宣

社事商告廣

造勝中田

前日千阪大

番〇九七三戎電
ルクナミ

年周五成結

てし際に演出座角

子智美江大



事變が起りまして間もない頃から人通りの多い街々に千人結びを求められる女性のお姿が見うけられますこの光景は眞に涙を誘ふものがあります。この間も角座の稽古場からお稽古のかへり心齋橋筋へ買ひものにもまいります時、丁度戎ばしの上で可愛い十五六ぐらゐのお嬢様が「すみませんが明日のあさ兄が征きますので、どうか」と云つて差し出されました千人結はまだ半分も残つて居ました。私はそのお兄さま、皇軍勇士の武運長久を心に念じ力を針にこめて結ばして頂きました。半分以上も残つてゐるのに明日の首途までに結び上げられる御心勞は一つ

道頓堀豆新聞

日曜祭日午前 十時より三回 角座の大江劇

女ながらもよく一座を率いて天晴れな活躍を續けてゐる大江美智子一座は、平日はヒル正午、ヨル五時半の二回開演、日曜祭日は午前十時より三回開演と決定「竹光劍法」「吼える軍犬」「新説辨天小僧」と共にプログラムの第二は大江が五周年記念の挨拶を述べ引續いて得意の舞踊を踊り抜く事となつてゐるが「美智子の口上」これファンには一つの魅力となつてゐる。

時局もの脚本 を十吾に送つ た藝妓のたまご

「私は藝妓のたまごですが芝居が好きで随分見て参りました。一度御覽願ひます、堀江の文英」と云ふ手紙と共に中座の十吾の許に送られたのが三十枚位の脚本、十吾が部屋の高須文七に讀ませると時局ものて

病身で慰問袋の手傳ひも出来ぬ一藝妓が毎夜近所の神社へ皇軍の武運長久祈願の参詣を續けてゐたが、或を夜一人の婦人を救つた、この婦人は出征して名譽の戦死を遂げた勇士の妻、此處でその藝妓が非常時に處する女の道を滔々と解き喋べる、その時出征兵を造る歡呼の聲が聞えて來る

と云ふ、一生懸命に書いたものだらうがストーリーが通るる丈でこの儘ではどうにもならない女の身で、しかも恐らく働らいてゐる

通りでないとい心からお察し
ます。自分にも此の前に角
座に出ました時五つの千人
針を拵らへました経験から
もよく判ります。しかしこ
の一通りでない事を仕遂
げやうとなさる一念こそそ
の尊い念力が天にも通する
のでありませう。

私の一座も歩みはじめて
はや五年、その越方を回顧
すればようやく峠半ばです
残る半分以上の遠い峻坂が
日のある中に頂上に向つて
行き着くことが出来ませう
か？どうかと思ふ時、あの
千人針も乙女の手に一夜の
中に仕遂げられ今は砲煙彈
雨の戦地に勇ましい働きを
されて居る彈除けとなつて
居ると思へば、一念岩をも

通すのたとへ、すつかり眞
摯な氣持になり、未熟非才
の私も、盲目蛇におじすの
に至らぬ者は至らぬながら自
分に興へられた業に銃後の
女性として力の限りを盡し
て務めることが、何にも勝る
御報國と確く信じて居りま
す。結成五年の記念公演も
幸ひにこの稿をつくる初日
から四日目までは連日連夜
の満員つゞき文字通り壓倒
的な成績を挙げ得ました。
その素晴らしき幸運に恵ま
れた私は明日の責任の大な
るを感じます時空怖ろしく
なるばかりでございます。
最後に國民精神總動員の秋
出征勇士に送る心に、物に
誠心を籠めて女性も女性と
して君國のためにお役に立
ちたいと思ひます。

人だらうし、脚本を書くといふ事
はその人の一つの性癖でもあるの
だからどうしたもんかと憚んだ十
吾、文藝部の連中に何とかならん
かと渡しが、住所も判つてゐるの
だし、誰か本人に會ひに行きさう
なものなのに、未だ誰もその婦人
に會はうともしないので近く十吾
から正式の使者を立て、本人の意
志を確かめた上、藝妓がよいか作
家が望みなのかを聴く事にしたと
云ふ。

大顔揃ひの配 役で「狹間合 戦」期待さる

十一月の歌舞伎座畫の部に上場「
木下蔭狭間合戦」は東西劇壇を通
じて頗る珍らしい狂言、東京では
明治二十八年五月明治座の中幕に
「銚草竹中官兵衛」の名題で團十
郎が上演して以來實に四十年振り
、恰し日清役で、歌舞伎座でも川
上一座が「威海衛陥落」等上演
してゐたとある。此度は白井前會

長が時局に當り戰國時代の古典劇
をと種々選擇の結果、官兵衛岩
と採擇したが二時間餘の長丁場で
は不可なりと、古典ものに通じ團
藏、荒五郎、歌六等の官兵衛を知
つてゐる大川渡江氏に改訂を命じ
延若に話した處、河内屋も大乘氣
で故人の型を種々研究を重ね、名
型と傳はるものは尊重しそれに自
己の新工夫を加へ、他の役々の演
所を考慮し、カットを利かせて適
當の時間にて見せる事となつたも
のだが、十月は頓兵衛で成功した
延若が同じく老けの官兵衛で新機
軸を見せる外、扇雀の左枝犬清、
勘彌の大垣三郎、小太夫の四の宮
源吾、鶴之助の千里、錦吾の關路
玉太郎、壽之助の郎黨らに梅玉が
小田春水、魁車が垂井藤太、壽三
郎が此下藤吉郎で顔を揃へる大舞
臺で大いに期待されてゐる。

相生、呂の大 熱演壯絶文樂 の軍事劇

天網島と矢口渡

十月の歌舞伎座から

松本康子

何しろ久し振りの大歌舞伎の事として色んな意味で、どれもこれもそれ／＼興味深く見せて貰ひました。

就中非常時の色彩で塗りつぶされた中に、残る古典の花二枝と言つた所に矢張り一きわ強く心に残るものがあつた様う感じるの私だけの好みなのかしら？上方趣味の傳統がさうさせるのか、それとも亡びんとする古典藝術への限り無き懺れから發する愛惜の情からか、何にしてもしんみりとした芝居の味に酔ひ浸る事が出来たのは何と言つても『天網島』と夜部の『矢口渡』とでありました。天網島は近松の原作を極度に尊重したまこと

道頓堀豆新聞

文樂座人形浄瑠璃は一日より新町演舞場に初日を開けた、呼びもの、新作御旗の本は、應召待機の吉野辰太郎の家庭から勇ましい出征風景、次いで平頂山の大激戦までを浄曲化せるもので、作曲の鶴澤清二郎はこの脚本を受取つてから二週間臥所に休む間も枕元には稽古臺と、三味線を置き文字通り精魂を打ち込んで完成したもので相生、呂の太夫も文樂の新人と稱されてゐるだけに二人切りで演つて見やうと種々工夫を凝らし、去る二十九日相生太夫宅で總稽古同様の猛練習を行つたが、かつての「肉弾三勇士」とは又異なる壯絶さを充分に表現し得た近來の新作で幕開きは「抜刀隊」出征では「天に代りて」を、敵軍の逆襲に部隊長の戦死する悲壯なる場面は胡弓を表に蔭で「戦友」を、友軍の到着には「國の鎮め」を、ヲツパと軍歌を巧みに樂籠中のものとした三味線で聞かせ、最後に特にこの「御旗の本」の爲に三龜甲氏がものした勇壯で歌ひよい軍歌調の五章を「柳」の手に軍歌のラツパをアレンジした地で相生、呂が合唱するが、その歌詞は左の如くである。

花嫁姿の辨天 小僧大衆興味 を覗つた

角座の大江美智子劇は軍用犬エレックス登場の女間諜劇「吼えろ軍犬」竹光劍法等と共に「新説辨天小僧」を上場、これは従來歌舞伎畑の「濱松屋」の強請を見

に良心的な演出であつたと
言ふ事が第一に結構でした
人物の出入りから衣裳や科
白の端々に到る迄、これ程
忠實に近松の味を損ふ事無
く浮彫した様に見せて貰へ
た事はかつて味ひ知らぬ喜
びでした。この上の欲には
何故原作の上の巻河庄が出
なかつたかとそれ許しが惜
しまれてなりません。何時
も見なれた時雨の炬燵とは
事變り、まるで違つた紙屋
内の場の舞臺装置の良さ、
登場する人物が地味であり
乍ら作者の傀儡にならずに
それ／＼現實的な實在性を
もつて描かれ、それがお芝
居の爲の道具として動かさ
れずにそれ／＼深い人間性
に立脚していかにも宿命づ

けられたものゝやうに行動
してゐるのが近松物の味な
のかしらと今更らしくこの
名作者を考へ直して見た
致しました。治兵衛やおさ
んの境遇に見る運命の戯れ
と、それによつて惹起され
る不幸な渦巻きに弄ばれ
る小春や孫右衛門や二人の
子供達の身の上の様々な運
命の相を見せられたこの一
篇の魅力と感激とを改めて
考へ直して見たい様な気が
致します。上の巻の登場人
物に見られる正確な風俗の
考證や道具装置の繪畫的な
趣やさては下の巻の情緒
的な寮圍氣の良さ等特に印
象深いものがありました。
役々では治兵衛は勿論中
心人物であり乍らどの場面

せ場とし、河内山もぎきの日本駄
右衛門をも登場せしめる興味本位
の脚本で大江が花嫁姿の濱松屋の
娘お菊で顔を見せ、駄右衛門が従
一位大納言の御使者でとわたり
芝居が濟むと今迄温順に見えたお
菊が胡床を組み父幸平を脅迫する
悪黨一味を前に、歌舞伎調の名舞
詞知らざあ云つて聞かせてやらう
と居直る痛快な所を見せ、大向ふ
み唸らせると

女の流行や新 作「軍事郵便」

温灸師のお祖母さんが姑氣質を
清算する時分を背景とした新作
出征験の母 // はじめ、十日より
の中座の松竹家庭劇三の替り陣の
演しものは左の如く決定した。

第一茂林寺文福作、高須文七脚
色 // おでんや横町 // 二場、第二
茂林寺文福、館直志合作 // 軍事
郵便 // 一場、第三中野實作、山
上貞一演出 // 女の流行 // 三場、
第四茂林寺文福作、尾崎倉三脚

色 // 出征験の母 // 二場、第五茂
林寺文福作、大和田想外脚色 //
駄鐵砲 // 二場

壽三郎の川並 の政吉

「中山七里」 の大道具

歌舞伎座の大歌舞夜夜の部の一
番日長谷川伸作 // 中山七里 // は、
最愛の妻おさんの貞操を蹂躪した
憎い男を殺し兇狀持となつた川並
の政吉は、命の綱のおさんの自殺
に愈よ孤獨の身を飛驒の高山在へ
奔つた、おさんに似た女の出現、
それは江戸で目明し文太郎の横戀
慕を斥けた故に放火の濡れ衣を着
せられたおなが愛人徳之助と二
人連れの佻しい門付の姿だつた。
目明し文太郎はかつておさん故に
政吉を壓迫した憎い男、彼もこの
土地が故郷とて不計すも歸省して
顔を合した、おさんに似たおなか
から離れたくない政吉の異常な本
能と執拗な文太郎の追跡、怯え乍

道頓堀豆新聞

でもじつと受けて動いて行かねばならぬ役所故それだけ映えない立場にゐるので自然目立つた芝居ができない。止むなく地味に澁くならざるを得ない。上の巻は殆んどおさんの爲の芝居であつてこの場の梅玉の藝は煙銀みたいにくすんだ中に光る物を漂へた様な感銘を與へられた。その他孫右衛門をやつた市藏の慈味の深さや、五左衛門をやつた箱登羅が悪く躁々しなかつたのもよかつた。扇雀の小春はこれと言ふ演所がないので氣の毒と言ふ外はない。矢口渡になると、遠かに舞臺上の色彩なり全體の調子なりがずつと末期的になつてくる。地味な民家と竹

籾のある風景から一轉して紺青の大海原を背景にした朱欄の高樓、緋の襦袢に崩れ島田を振り亂した美女と赧顔白髪温袍姿の老爺を配しに構圖の度強さ、矢口渡の一幕はパノラマの様な色彩の變化が面白かつた。延若が、義峯と頓兵衛、義興の靈と三つの役を一人でやる事は一寸何うかと思はれた。無人芝居でなら知らぬ事、又早變りと言ふには時間的餘裕があり過る、この三つの役を強ひて一人でやる程の事もないと思ふが何んなものでせう。むしろ頓兵衛一役にもつと野心的な演出を見せた方が面白いのではないかと思はれますが。

らも戀の甘酒に震らうとする美男女の二組が天懸崖に逼り白雲を帶つと稱される中山七里の絶景をバックに、各自人間本来の純真な立場から自分達を顧みる全二幕五場、人間の強さと弱さを赤裸々に見せる壽三郎の政吉と、小太夫の文五郎の二人切りつて幕となる大詰等大道具の結構と相俟つて頗る興味深いものがある。

四ツ辻に見る 定評の役々

他成太郎、鶴之助、錦吾、箱登羅、奥山ら登場、床は岸、榮、壽の各太夫に團信大昇、竹之助の三味線である。

歌舞伎座の夜の部 第三、川村花菱原作、鳥江鎮也脚色「涙の四ツ辻」の序幕、新町千年屋の臺所の場は書卸し當時より賞讃を博した。梅玉のおたつ、魁車の桑次壽三郎の染之助の名トリオで、男には頼まれぬ物質だ、いや人間は情に生きるべきだと、花柳界の女に見る二つの代表的な生活心理と情痴の世界から醒めた男の眞情を噛み合せ、十八年間忘れてゐる管の男の出現に、心の動搖を押へ切れぬおたつ、只管今迄の不實を詫び入る染之助、子迄ある二人を昔のやうに添はさうと一人はしやいでゐる桑次、しかしどうにもならない廓女の意地が人情を堰き止める迄場面は、又亦新しい技巧も窺へて人氣を呼んでゐる。

歌舞伎と文樂 競演の「新口村」

新町演舞場で大いに人氣を集めてゐる文樂座人形淨瑠璃の「新口村」と歌舞伎座のそれと比較して見る事は好劇家にとつては頗る面白い研究題目と云はれてゐるので活字になる部分をお目にかける。
(文樂) 忠兵衛は相生、呂、梅川は伊達、孫右衛門は長尾、和泉、三味線は道八、人形は榮三、文五郎、玉次郎
(歌舞伎座) 忠兵衛と孫右衛門は早替りで、梅川、延若、扇雀の

— 頁の畫映 —



「支那に怒鳴る」政題

大船 作品 吼える銀ちゃん

脚本	野田高梧
監督	齋藤寅次郎
撮影	武富善雄
音楽	早乙女光
配役	
高職	銀造……………坂本武
女房	お辰……………飯田螺子
娘	お葉……………東山光子
親方	清吉……………野寺正一
美乃屋の内儀	旦那……………武田秀郎
息子	敬之助……………近衛敏明
番頭	六兵衛……………石山隆嗣
浪曲学校の先生	徒……………若宮金太郎
生徒	B……………出雲八重子
同	房……………小牧和子
女	房……………小牧和子

火事が消えてから駈けつけるのを常例として居るウレンキ高職銀造にはお辰と云ふ超重爆型女房とお葉と呼ぶ番茶も出花の娘があつた。釣堀り屋をしてゐるこの銀造一家は看板娘のお葉を目當てに何時も繁昌して居た店のお客であり、お葉の戀人、紙間屋美乃屋の息子敬之助が毎日會ひに来て居た。最近銀造は女房や娘にも内緒にせつせと學校へ通つて居た四十の手習ひかと思へばこれは又ナント浪曲學校であつた。いよゝお葉敬之助の仲も

話が進み銀造とお辰は美乃屋へ招かれた。銀造には酒を呑むと變な癖があるので娘の爲には我慢して居つた彼は美乃屋の主人に誘はれて遂に飲んでしまつた。飲んだ彼は癖を出してしまつた。手當り次第に他人の物を持つて來ると云ふトシデモない癖であつた。其の爲に一時縁談も中止になつてしまつた。怒つたお辰に離縁されてしまつた銀造はしよんぼりして居る處を浪曲學校の先生に救はれた、目出度く話も纏つてお葉と敬之助の婚禮が行はれた。夜彼は他折乍ら娘の花嫁姿を眺めてゐるのであつた、其の夜、親方清吉の口きゝで離縁解消された銀造は更生の意氣高らかに皇軍慰問のため東京驛を出發するのであつた。目指す戦線で得意の浪曲を以て敵を惱ましつゝある銀造の勇姿、夜襲に——露營に——奮闘する銀さんの勇姿。

大船 作品 曉は遠けれど

原作	竹田敏彦
脚色	野田高梧
監督	八木澤武孝
撮影	佐々木康朗
茂原英	
吹込	
配役	
水原早苗……………田中絹代	
大演康男……………佐分利信	
京子……………水戸光子	
清……………突貫小僧	

- 父 和助……………野寺正一
 亙 理駿……………成田不二夫
 妹 紀美子……………春田英子
 母 ……親……………葛城文子
 亙 理 專 務……………奈良眞養
 花 柳 壽 女……………若水絹子
 實業家 和田垣……………谷麗光
 同 内 田……………如月輝夫
 三 輪 富 子……………織田千恵子

梗概

康男の戀人でありその妹京子の親友である早草は彼の家に同居して京子と共にバスの女草掌となり街頭に働いて家の生活を支へてゐた。康男は大學を出たばかりで病父和助は彼の就職と早苗との結婚を貧しい日々楽しく空想してゐるのであつた。「日東物産」に就職試験をうけに行つた康男は偶然専務の亙理駿一と親しくなつた。そして康男一家がこそつて期待した採用決定の日に届いたものは意外補缺の一番で誰かゝ棄權せれば入社出来ぬと云ふ駿一からの内報であつた。早苗は和助始め一家の入達の失望を見るに忍びず妹京子と名乗つて突然駿一を訪ひ事情を打明けて康男のために棄權を哀願した。勇敢な早苗に正しい生活意識を呼びさまされた様な氣がして彼はその願を入れた。駿一はその日以來康男の妹京子として早苗を深く愛したのであつた。奇蹟的な入社に不審を抱いた康男は事情を知るべく駿一に會つたが、早苗のはからいで眞實を知る事が出来なかつた。かりそめの幸福康男の家に平和があつた駿一は京子の早苗に

求婚しまじめな戀を打明け見合ひの日まで通知して來た。苦しんだ早苗は駿一に會つたが彼の堂々たる愛にほだされて語れなかつた。京子は駿一に乙女らしい戀を感じ胸をときめかせたが總てを知つた駿一は憂鬱であつた。惱みの果て早苗は家出し舞踊の師匠花柳壽女の所へ身を寄せた。康男は早苗が貧乏な生活が嫌になつた結果だと誤解して京子の辯解もきかず彼女を詰つた。失戀の苦しさにほんやりした京子はバスに衝突して負傷し入院した。早苗は新聞でこれを知り壽女から三百圓の借金をして送らせた。康男は怒つて受取らず京子をごんなにしたのも結婚を申込んで勝手に解消した駿一の責任だと彼を面罵した、だが深く早苗を愛する彼は自分の輕卒丈けをわびいづれ誤解の晴れる時が來ると語つた。早苗の借りた三百圓は惡辣な實業家和田垣から出てゐた。だまされて連れこまれた箱根の温泉宿で早苗は駿一の名を呼び乍ら和田垣の誘惑から身を守るべく苦闘した。風よ吹くな…早苗のために！

懸賞當選題名
 大船 娘よ何故さからふか
 作品

- 脚 色 伏見 晃
 原 作 野村 浩 將
 監 督 高橋 通 夫
 撮 影 高橋 通 夫
 フジャの若旦那正雄…佐野周二

- 父親 藤守逸平……………坂本武
 ショップアガール 春江……………高杉早苗
 父親 田村周作……………河村黎吉
 料亭の女將 光子……………吉川満子
 娘 千代子……………東山光子
 友 達 節 子……………森川まさみ
 小 僧 忠 造……………磯野秋雄
 同 新 吉……………阿部正三郎

梗概

父親逸平が昔馴染の光子の料亭へ出入するのをきつく意見する程颯爽たるフジャの若旦那正雄は戀愛に於ても鐵腕の様な心臓の持主であつた。偶然雨の山で救はれた千代子、節子、春江のグループにお互ひに一人「い、子」にならぬ様協定を結んだが内心彼を張りあつて俄然戀愛戦線異状があつた。ネクタイ店のプリマドンナ春江は評判の孝竹夫で父親周作の自慢の種である。心臓も相當丈夫で千代子節子をK。Oして正雄と仲良しになつて終つた。そんな事は夢にも知らぬ千代子は母光子に桃色の相談をして正雄との結婚を依頼した我が子可愛いさに光子は昔語りの末逸平にその話を内諾させた。家に歸ると胸に一物、早速逸平は千代子の話を切出したが正雄の心は動かぬばかりか逆に光子の事を云はれて籤をつゝいて蛇を出して了つた。それで春江は下見分にと云ふ事になり彼は春江の家へ出かけて行つた。そこまでは無事であつたが途中込みあつたバスの中で乗りあはせせた周作に嫌と云ふ程足を踏まれた逸平は止せばいいのに負けず踏みかへし涼しい顔をした。そして

周作がおさまらぬ胸を春江にグチつてゐる處へ訪れて来たのは逸平であつた。

天候險惡！「何の用で来た？歸れ」と云つた調子で談判は破裂。春江も正雄も父親から説教されたが彼等は親達より現實的であつた支那事變號外が戸外に飛ぶ時、非常時の戀愛に處して二人は正雄の家のカンヅメの倉庫に籠城してつまらぬ感情問題で子供の結婚まで迷惑かける親達に對抗、理解の日を待つた。あはてたのは逸平、周平である。然し今更頭を下げては親爺の責備が下る。彼等は倉庫にらめて顔負けした。それを知つた千代子は一人考へに沈んだが、さて倉庫からは明朝で眞剣な愛の戦術が準備された。

京都 作品 お静禮三

原作 川口松太郎
脚色 泉 治郎吉
監督 大曾根辰夫
撮影 森尾 鐵郎

禮三……………坂東好太郎
お静……………岡田嘉子
彌十……………小島和子
四八……………坪井 哲
七……………高松錦之助
権内……………奈良澤一誠
六郷……………柁木欣之助
從者……………志賀靖郎
上下の甚三……………柁木欣之助

濟 七……………尾上榮二郎
七 五 郎……………遠山 満
駄菓子屋 婆……………柳 咲子
三 好……………風 間 宗 六
中 村……………津 田 徹 也

梗概

譯あつて江戸を出奔した禮三は、家も大小も捨て、七五郎親分の世話になり、其の身内の彌八の娘お静の人嫁として望まれ今では四十松と云ふ子供までもうけ、七五郎の繩張りでは押しも押されぬ權勢を持つてゐた。

或る雨の日上下の甚三親分が七五郎の繩張りを荒した事からそれを制裁すべく後をつけた禮三は、計らずも禮三を探して江戸より來た伯父六郷内膳と出會つた。

禮三の兄豊後の遺言により連れ歸つて跡目を繼がそうとする。伯父は嫁がる禮三にもかまはず七五郎親分に話の纏るやう依頼したやくざの意地でそれを承知した。

七五郎は彌八と相談の上お静のことも四十松のことも無視して禮三を江戸へ歸へますのであつた。それと知つたお静は誰に頼るべくもなく明け暮れを泣いては諦めて暮すのだつた。

剩つさへその知らせを聞いた彌八は病みの身體をも無理して馳け付けたがもろくも其の場で返り打にされた。

一時の激變におそはれたお静は、日増に視力を失つてゆき、或る秋の鎮守祭の日喧嘩の渦中へまざれ込んだ四十松を狂氣の如く探してゐる内、遂に失明すがりつく四十松を抱き乍ら見る事が出来なくなつて終つた。

それから正月の門松が立ち善光寺へ獻納金をすべく江戸より警備を固めた一行が村を通り過ぎた。

その馬上の侍こそ誰あらう、江戸へ歸つた禮三だつた。

深谷の宿に落着いた一行より一人引き返した禮三はお静と四十松を訪ね一部始終の話を聞き憤慨やるかたなく、お静と四十松を亡父の墓地で待つてゐる様云ひ残して置いて上下の一黨をおそひ討ち滅したつた。

久方振りて歡喜の涙に包まれた親子三人は墓前にゆかすき禮三はお静の目を元通りに見せると誓ひ、役目を果せばきつと迎へにくるとて雨に煙る峠を又勇ましく越へて行くのであつた。

× × ×

樽屋おせん 幕一

芝居見たま、

「**麴屋宅の臺所**」**麴屋長左衛門**方の臺所では、今日初代長左衛門の法事とて當家お出入の男女達が減らず口して御馳走の用意をしてゐる。初代の旦那に引替へ當代の旦那は年齢が若いだけに粹人ちやと喋舌り合ふ所へ樽屋の女房おせんも今日法事を手傳に來るおせんは三年前まで矢張り當家へ上奉公をしてゐたが、今は伊助と云ふ良人と世帯を持つてゐる。

長左衛門が來て、藏の中から小錢を出しにおせんを頼み、共に藏に行く、出て來たおせんの髪が亂れてゐるのを、長左衛門は棚から鉢の箱が落ちて亂れたので申譯がないと詫言る。

所へ女房おさがが來り、これは旦那が藏の中でおせんと密會したのだと嫉妬して、おせんを散々に打つ。

來合した伊助がこの様を見て疑心を起す。

長左衛門は呆氣にとられて氣の毒かる、この時奥の間に鉦の音聞えはじめる。

「**樽屋伊助の住家**」伊助の家ではおせんが伊助の持歸つた徳利の酒を呑めば、伊助は御主人と不義した言譯がないの

で無理酒を呑むのだらう、と嫉妬する。

おせんはそれを腹立たしく思つた。

けれども伊助の胸の悶へは解けぬ。

やがておせんを引倒し、この上は仲人呼んで内から放出すと逆上して出て行く、跡へ長左衛門が女房おさがの不埒を詫びに來る。

今日の濡衣をどうぞ勘忍してくれと云へば、思案に沈んだおせんは、長左衛門の手を握り緊め、大勢の中で立てられた嬉しい浮名の果、これが女の意地と、自分が呷つてゐた茶椀酒を長左衛門と共に飲む折、おせんが行燈に躓き燈は消へる。

「お前の家に男の聲がする」と聞いて、伊助が急ぎ歸つて來る。

途中で、
「お前の家に男の聲がする」と聞いて、伊助が急ぎ歸つて來る。
長左衛門は驚いて一散に逃げる。

この間におせんは覺悟を決めて前かんなを取つて喉元を突く。

伊助が暗闇を漸く探り寄つておせんを抱起せば、苦しい息の下からおせんは、
「淫奔者で御座んす」と云つてそのまゝ落入る。

伊助はじつとそれを抱緊めた。

月は芽へて明方の烏が鳴き渡る……。

中山七里 幕二

芝居見たま、

動く漉えた流れの面に黄昏の薄明りが映えて居る。

深川の木場で働いてゐる川の政吉は血縁の者としてない全くの一人ぼつちであつた。

その政吉に一道の光明を投げてくれる輝しい戀がある。

彼はその戀を『生きてゐる俺の命の綱だ』と云つてゐた然し、その戀に悲しむべき破壊が起つた。金力と権力と二

つながらに兼ね備える政吉の使用主材木店御差屋の主人が政吉の情人であるおさんの貞操を蹂躪つた事に端を發する爾來政吉の存在にある不安を

抱く御差屋は、己れの爲には何物でも犠牲にする云ふ冷酷さと、狡猾な才智の所有者——岡ツ引龜久橋の文太郎を寵絡し、暗に政吉を壓迫してゐた。政吉は熱愛するおさんが御差屋の爲めに傷つけられたのを確實に知つた時、必然おさんに對する激情を覺えたがそれはやがて轉じて御差屋へ向つた。被害者よりも加害者へと、政吉の憎悪は狂はしく奔騰して竟に政吉は、自分の戀愛を破壊した御差屋を殺害したが、『俺の命の綱』のおさんも既に自殺してゐるので、最早彼の前途は闇黒であるが、政吉の手には御差屋が濟罪の爲めに差し出した財布が残つてゐる。彼はそれを持つて飛驒高山在の久々野に知邊を頼つて走つた。

其處に恰もその頃、江戸の零落者らしい徳之助おなかと云ふ美男美女が哀切な節で門附の唄をうたひ、錢を乞ふて歩いてゐた。政吉はそのおなかを一のみるより迷ふ心を抑えても抑え切れず、竟にはその跡をさへ尾けた。

不思議にもそのおながが亡きおさんに瓜二つなので……一方高山生れの龜久橋の文太郎は、江戸の成功者と云ふ誇りを持つて歸郷したが、郷黨は文太郎を快く思はなかつた。その文太郎は成らぬ戀の意趣返しと、犯人檢舉の功名心とでおなかを放火犯人と認め探してゐるのであつた。

狭い山の街で忽ち發見されたおなかは、文太郎の苛酷な捕縛の手に怯え悲しみ、生死を共にと誓つた情人徳之助との

生別を餘義なくされなければならぬ。それを目撃して政吉は、赤の他人の女が嘆き悲しむとは見えなかつた。おさんが苦しめられて居ると思ふのであつた。『俺の命の綱』がまだ磨められてゐると思つた政吉は兇狀持の己れを忘れて文太郎の前に一身を晒し窮地の男女を救つた。そして政吉はその後を追ふて南飛驒の中山七里へ逃げて行つた。

——が此の三人連れの旅は破壊を目の前にして歩いてゐたおながが見る政吉と、政吉が見るおなかとそのところごころは到底一致した平靜さではなかつた。だが、此の三人を繞る外には文太郎の追手が延びてゐる。内には退つびきならぬ哀切な戀愛の音譜が狂はしく騒いでゐる。

編輯後記

※北支、南支に皇軍の大勝の報が、日と共に加へられて行く。大日本帝國万歳を心から叫び、銃後の國民として、私達演劇にたずさわるものも、質實な生活をおくらねばならない。

※劇團もこの非常時に處し、各座各劇團が非常時體制をとつてゐる。破格の観劇料、時局の上場、上演時間の短縮と演劇報國の實を盡してゐる次第である。

※先づ、歌舞伎座はこの國民精神總動員の秋にふさわしく、大歌舞伎が、十月に引續いて、革新興行の陣を布き、中座は續演にづく續演と家庭劇が物凄い爆笑彈の放列、角座へは久し振りに大江美智子が登場、各座各劇團が、熱と力の舞臺を見せてゐる。

※今月の本誌も非常時體制下にあつて、各座の陣容に隨つて編輯した。長谷川先生をはじめ、高安、本谷他諸先生が、かはらぬ御

厚志のもとに玉稿を寄せられ、深く感謝致します。

※殊に關西歌舞伎論としての鞭撻の言葉は、俳優をはじめ、劇團當事者も有難く、享くべきである、そこに關西歌舞伎の發展があるものと信じます。

※發行日が遅れましたがこれは編輯部が非常に遺憾とする點で、次號は、吉例の顔見世號でもあり、ベストを盡して一日でも早く讀者諸氏の許におくりたいと思つてゐる。

※顔見世號は特に寫眞にも最新版を使つて、豪華な道頓堀を作りあげたいと存じます。※寒さに向ひます折柄、諸先生はじめ、愛讀者各位の御自愛を祈つて筆をおきます。

(村上 懸)

次號豫告

吉顏見世特輯

三十五錢

昭和十二年十一月十五日發行
月刊「道頓堀」第十一年
雜誌「道頓堀」第百廿四輯

◇誌代は前金お拂を願ひます。
◇郵券代用は一割増にて御註文を願ひます。
◇御相談の上廣告掲載の需に應じます。

廣告取扱所

大阪電報通信社
大阪市北區中之島二丁目

廣告の御用は電通または當編輯部廣告係へ御申下さい。

部一 金三十拾錢(郵錢五厘稅)

昭和十二年十一月十五日印刷
昭和十二年十一月十五日發行

大阪市南區久左衛門町八番地

發行所 道頓堀編輯部

編輯者 松本泰三

印刷所 道頓堀社印刷部

大阪市南區久左衛門町八番地
松竹株式會社大阪支店

發行所 道頓堀編輯部

編輯京都支部

京都市姉小路東洞院西
大橋孝一郎方

あぶら取紙始産 辻と添附

スキナあぶら取紙

姉妹品

スキナ紙白粉
スキナ石鹼

昇竜特許 常用新案

スキナ御化粧紙

(あぶら取兼紙白粉)

各品共御愛用を乞ふ!

標商録登



發賣元 大 阪
朝日堂株式會社

本舖 大 阪
中田スキナ屋謹製



昭和十二年十月五日(第三種) 每月發行
昭和十二年十月十八日(印刷) 每月發行
昭和十二年十月五日(印刷) 每月發行



品作特船大竹松



かづらがき故何よ娘

演主・苗早杉高・二周野佐



原作・野村浩將
監督・伏見晃
脚色・高橋通夫
撮影・高橋通夫

坂本武
河村黎吉
吉川満子
東山光子
森川まさみ
磯野秋雄
阿部正三郎
助演

「道頓堀」

第十二号 第百三十四号

一部金参拾錢